

2020年度ティーチングポートフォリオ (文学部)

<目 次>

1. 安 藤 弥 (教 授)	p 1
2. 市 野 智 行 (専任講師)	p 2
3. 金 山 泰 志 (専任講師)	p 5
4. 古 川 桂 (専任講師)	p 8
5. 園 田 博 文 (教 授)	p11
6. 鶴 見 晃 (准 教 授)	p14
7. 深 町 悟 (専任講師)	p18
8. 福 田 琢 (教 授)	p21
9. 三 川 智 央 (専任講師)	p23
10. 箕 浦 尚 美 (准 教 授)	p26
11. 森 村 森 鳳 (教 授)	p29
12. 渡 邊 幸 彦 (准 教 授)	p32

1、教育の理念

本学は浄土真宗・仏教の精神に基づく大学であり、建学の理念である「同朋和敬」を教育理念とする。お互いを「師弟」ではなく、ともに学び合う学友とし、異なるお互いを敬い、真に和していく関係を「同朋」と呼び、大切にす。また、私達は歴史的存在である。歴史は過去では無く、積み重なって現在を成り立たせているものである。未来に向かい、よりよく歩むために、健やかな歴史的視座を豊かに養う教育を重視している。

2、担当授業の概要

- ・宗教と人間（親鸞と現代） 90名
- ・基礎演習Ⅰ 15名
- ・真宗史Ⅰ 10名
- ・仏教史（日本） 60名
- ・日本史特講 50名
- ・人文学演習ⅠⅡⅢⅣ 20名
- ・仏教文化演習ⅠⅡⅢⅣ 10名
- 名古屋・中村学（歴史文化） 30名
- ・真宗史〔別科〕 30名
- ・教化学演習A〔別科〕 15名
- ・仏教人間学研究Ⅰ〔大学院〕 10名
- ・仏教史研究〔大学院〕 2名

3、教育の方法

- ・根本的には、「勉強」ではなく「学問・研究」に取り組むこと、仏教「を」学ぶのではなく、仏教「に」（自らを）学ぶことを基礎としている。
- ・その上で、基礎知識の習得のために講義形式を実施し、実践経験の蓄積のために演習形式を実施する。フィールドワークも重視して実践している。
- ・健やかに生きる力としての仏教、問題の本質を見極める力としての歴史的視座を身につけてもらうため、自らの人生と社会的な現場を常に実感する学びの場を形成する。

4、学生からの評価と授業改善への努力

- ・授業評価アンケートの数値は平均値以上を確保している。特記すべきは「わかりやすい」「熱意のある話」というコメントを多くもらうことである。
- ・改善点として指摘されやすいのは「内容が多すぎる」「配付資料に工夫の余地がある」といった問題であり、これは授業内容の精査、配布資料をよりスリムかつビジュアル化するといった対策を考えて実践している。

5、今後の教育目標

- ・教育はただ「わかりやすい」でよいものではない。高度な専門性を常に磨きつつ、それを適切な感覚で学生に還元し、ともに成長していくことを心がけていきたい。

1 教育の理念

本学の建学の理念である「同朋和教」に基づき、学部学科を越えて、「共に生き、共に学ぶ」ことのできる教育指導体制の構築が重要である。その体制を担う一人として、教育、研究に取り組んでいった。なぜ、同朋大学で仏教を、文学を、社会福祉を学ぶのか。特に、全学必須科目の「宗教と人間」を通して、人間学の必要性を仏教を通して学ぶことの意味を、学生と共有したいと考えている。

2 担当授業の概要

- ・真宗学演習Ⅰ／Ⅱ 8名
- ・真宗学演習Ⅲ／Ⅳ 8名
- ・教化学特講Ⅰ 5名
- ・教化学特講Ⅱ（旧カリを含む）6名
- ・七祖教義Ⅰ 4名
- ・七祖教義Ⅱ 5名
- ・浄土三部経講読演習Ⅱ 14名
- ・親鸞と現代B 89名
- ・親鸞と現代E（編入・再履） 21名
- ・釈尊と現代D 49名
- ・教化学講義（別科） 19名
- ・真宗学演習B（別科） 9名
- ・論文指導 8名
- ・教化学実習Ⅰ（大谷派教師課程） 7名
- ・教化学実習Ⅱ（大谷派教師課程） 7名
- ・教化学実習（別科） 19名
- ・仏教学（音大） 54名

3 教育の方法

仏教学科の半数は寺院出身者（別科はほぼ全員）で、将来僧侶あるいは住職なることを志している。具体的には大谷派教師資格の取得を目指すことになるが、その授業内容は大きく講義、講読、演習、実習に大別できる。講義科目は、仏教学、真宗学の基本的な知識習得のため、学びの土台となる基礎的な学びを主要とする。講読科目は、文献を読むことと、文献へのアプローチを学ぶため、発表と講義を交互に行い理解を深める。演習科目は、発表資料

の作成から論文指導まで、主体的な学びを基軸に置く。特に仏教から各自が何を学んだのか、という方向性の学びを大切するため、現代社会における様々な問題を取り上げていく。実習科目は、より実践的な法話実習や法語作成など、卒業後をイメージした学びを展開している。

4 学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートは少人数クラスでは実施していないため、全ての授業に関する評価とは言えないが、市野担当授業への近年（2018年以降）の評価について、まずは以下に列記したい。なお、設問内容の、Ⅰ：授業の目的・内容について Ⅱ：学生の授業への参加状況について Ⅲ：教員の授業方法や態度について Ⅳ：学習の達成度、授業への満足度に関しては、おおむね平均値を上回っているため、Ⅴ：自由記述を中心に、分析したい。

【良かった点】

- ・授業の進行速度
- ・前向きに楽しく受講することができた
- ・分かりやすかった

【改善すべき点】

- ・授業後の課題をもっと増やして欲しい
- ・板書を丁寧にして欲しい
- ・レジュメ作成について苦労した

【良かった点】は、私自身特に注意を払いながら授業に臨んでいるので、今後もアクティブラーニングなどを実施し、積極的な授業参加へとつなげていきたい。

【改善すべき点】は、コロナ下で本年の大教室講義は全て PowerPoint を活用した。次年度以降も、大教室での授業は PowerPoint を使用し、各自のノート作成など授業の受けやすい環境を維持したい。

また、演習形式の授業はレジュメの作成や文献に対するマナーについて、これまで以上の指導の必要性を強く感じた。特に 2 年次から履修できる講読演習科目を多く揃えている本学においては、卒業論文に向けて早い段階で、レジュメや文献に対するアプローチを学習できる環境にある。レジュメ・論文作成に関しては、授業ガイダンスとは別の時間を設け、指導する場の確保が必要となってくるかもしれないが、まずはレ通常の授業の中で、繰り返し丁寧に指導していくことが肝要であると思われる。

次に、アンケート結果には表れていないが、仏教学科は学科生、シニア生、聴講生、大谷派教師課程履修者と、それぞれに受講意欲に温度差がある。この点をどう見据え、全体的に積極性を持たせた授業としていくか。この点も課題を持ちながら取り組んでいきたい。

5 今後の教育目標

講義、講読、演習、実習の四領域を意識し、机上のみの学びにならないよう、学生が主体

的に学ぶことができるような方法を取り入れていきたい。

特に、4年間の集大成である卒業論文の作成については、テーマ設定から論文の書き方に至るまで、よりきめ細やかな指導が必要であると考えている。

2020年度ティーチングポートフォリオ

文学部人文学科 金山 泰志

1、教育の理念

同朋大学文学部人文学科の教育理念は、「建学の理念である「同朋和敬」の精神に基づき、社会的な価値観に埋没しがちな個性の存在価値を大切にします。文学・歴史・思想・文化の各分野におけるアカデミックな教育を基盤に、人間そのもののあり方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことが本学科の教育目的です」（『学生生活 2020』3-11）とある。

金山は主に「歴史」分野を担当するものであり、「歴史学」主に日本史の領野から、教養的な「歴史知識」の教授に加え（授業としては講義系）、日本史の卒業論文の作成を通じ（授業としては演習系）、卒業後の社会で最も重要となる「思考力」を養うことを意識し、授業を行っている。

2、担当授業の概要

基礎演習Ⅱ 27名
基礎演習Ⅲ 27名
基礎演習Ⅳ 9名
人文学演習Ⅰ 9名
人文学演習Ⅱ 9名
人文学演習Ⅲ 7名
人文学演習Ⅳ 7名
人文学講読演習Ⅰ 31名
人文学講読演習Ⅱ 23名
日本文化史（思想史） 100名
地域文化論 21名
スポーツ文化史 10名
現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式） 78名
日本史概説 33名
サブカルチャー論 44名
歴史文化概論Ⅱ 47名
古文書基礎学Ⅱ 33名
名古屋・中村学講義（歴史文化） 30名
卒業論文 6名
卒業論文指導 6名

3、教育の方法

文学部人文学科の教育理念にあった「教養力」を培うための授業としては、上記の授業の中では「日本史概説」「歴史文化概論」「日本文化史（思想史）」「サブカルチャー論」「地域文化論」「古文書基礎学」などが該当する。これらの授業は主に講義を主軸とした教授を行っており、日本史などの専門的知識ばかりを詰め込む授業とはせず、歴史と文化にまで視野を広げ、学生が卒業後に社会で生きていくうえで有用な知識を獲得してもらうことを意識している。そのため、既存の教科書などは使用せず、自身で作成した授業プリントを土台に、最新の歴史学知見を踏まえた授業内容となるように努力している。

もう一つの「思考力」を培うための授業としては、上記の授業の中では「人文学演習」「人文学講読演習」「卒業論文」「卒業論文指導」などが該当する。この「思考力」を培う授業は、文学部人文学科の学びにおいても最も重要であると考えている。ここでいう思考力とは、大学で自らが研究することによって得られる「専門的な思考力」のことを指す。自分で研究テーマを見つけ、その答えをその専門領域の研究手法をもとに、自ら考え導き出していく。その総まとめが「卒業論文」である。その研究活動の過程で、その専門領域ならではの「思考力」が自然と身についていく。歴史学であれば「歴史的思考力」であり、文学であれば「文学的思考力」となる。その思考力は本を読んだり、授業を漫然と受けているだけで、簡単に見につくものではない。大学生活四年間を費やして、研究を実際に行ってみることで、身についていく力である。演習の授業では、研究の技法を教え、専門的な論文を書き上げることを目標に、史料の講読や研究の進め方を指導している。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2020年度に実施された授業評価アンケートでは、授業の目的・内容、学生の授業への参加状況、教員の授業方法や態度、環境、学習の達成度、授業への満足度のほとんどが、平均値を上回っていた。

改善点としては、アンケートでの評価が比較的低かった「学生の授業への参加状況」である。講義系の授業は、当然この項目の評価が低くなることが予想されるが、講義の授業であっても、学生が授業に主体的に参加できるような枠組みを目指す努力が必要である。それは、今年度のコロナ禍の中で遠隔授業を行った際、講義の授業でも学生との双方向のやり取り（チャットによる質疑応答など）を初めて試行してみたが、これまで以上に反響があった（評判が良かった）。遠隔授業による思わぬ副産物であったが、講義系授業の改善の可能性を強く感じた。遠隔授業によって初めて試行し評価が良かったものについては、次年度も継続して行っていきたい。

5、今後の教育目標

「文系軽視」の現状打破が目下最重要の目標である。「文系の大学には入る意味がない」

といった評価は、社会一般の認識というだけでなく、文学部人文学科に入学してくる学生ですら少なからず抱いている認識である（現代教養概論の授業などでのアンケート結果から）。大学関係者ですら、そのような意識を抱いている者が少なくない。

大学が「知識」を得るだけの場所だと思っている学生は思いのほか多い。また、文系の大学が何をするとところなのか、これが世間一般にあまり伝わっていない。

そのことの周知徹底を、少なくとも同朋大学文学部人文学科に入学してくる学生には丁寧に行っていきたい。

(以上)

1、教育の理念

私は歴史学(西洋史)および学芸員課程の授業を担当しており、本学の教育活動において、以下の3点を重視している。

1、歴史的思考力を育むこと。グローバル化が進み、情報や流通において国境の意識が薄れていく一方で、偏った情報のみで得た知識から他国や他者との差別化を図ろうとする動きが強まりつつある。このような問題の背景には異なる時空間の文化に対する認識や理解が不足していることが考えられる。担当する西洋史分野の授業では、歴史的な文脈において現代に起こる様々な事象を捉える力をつけ、異文化への認識や理解を深めていきたい。

2、情報の真偽を十分に検討する力を育てること。多くの情報が溢れ、その情報を簡単に入手できるようになってきた現代社会では、一方でそれをそのまま鵜呑みにしてしまったり、悪意なく流用してしまったりする問題も多くみられる。歴史学の基礎である原点(=史料)まで戻り、史料の信憑性を検証する史料批判は、情報の真偽を十分に検討する力を育てること、主観的意見と客観的意見をしっかりと分けて考え、物事を認識する力を養うことにつながる。

3、文化財を過去から未来へ繋ぐ意識を形成すること。学芸員課程においては、教育機関や地域連携の機関としての重要性が増してきており、コミュニケーション力や企画力を養うことも授業に取り入れているが、何よりも文化財を守り、継承して次世代に渡す役割を担う学芸員としての意識を育てていきたい。

2、担当授業の概要

【専門科目】

欧州文化史 (36名)	人文学講読演習Ⅰ (4名)	人文学講読演習Ⅱ (5名)	
基礎演習Ⅰ (26名)	スポーツ文化史 (10名)	歴史文化概論 (59名)	
現代教養概論 (78名)	欧州現代事情 (13名)	現代世界情勢 (8名)	
西洋史 (6名)	文化交流史 (6名)	基礎演習Ⅳ (9名)	人文学演習Ⅰ (6名)
人文学演習Ⅱ (6名)	人文学演習Ⅲ (1名)	人文学演習Ⅳ (1名)	
卒業論文 (1名)	卒業論文指導 (1名)		

【共通教養科目】

外国史(西洋) (95名)

【学芸員課程科目】

博物館概論 (26名)	博物館史料保存論 (11名)	博物館情報論 (14名)
-------------	----------------	--------------

3、教育の方法

西洋史の基礎的な知識がない学生に対し、まずは関心を持ってもらうことが必要と考えており、身近なものや知名度の高い人物や事項から西洋の歴史を学んでもらえるように心がけている。またそこから西洋の文化や考え方、現代へのつながりを意識しながら進めている。歴史学の基本である史資料を提示し、どのようなことが読み取れるかを確認させている。授業の最後にミニツツペーパーを用いて授業を受けて考察したこと及び疑問に思ったことを記入してもらう。考察については、なぜそのように考えたのか根拠を示すことで論理的に思考することを身につけることを促している。考察や質問に対しての回答やコメントを次の授業冒頭で行うことにより、歴史的事象をどのような視点で捉えることができるのかを紹介し、次回以降に生かしてもらえるようにしている。

学芸員課程の担当する講義全てにおいて、講義形式に2/3、発表に1/3を当てている。前半の講義で学んだ内容が実際どのように実現されているかを自らの目で確かめるため、博物館を訪問して各分野について分析・考察し、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行う。これに対し、履修者全員が質問や意見を述べ、ディスカッションを行なっている。さらにディスカッションで得られた意見を入れてレポートでまとめる形を取っている。これにより博物館の資料を鑑賞する立場から博物館を作り、運営していく立場の視点を養うことを促している。これらの授業を通して、さまざまな視点から博物館の活動を自ら体験し、分析するとともに、パワーポイントを用いた発表やディスカッションを繰り返すことで、プレゼン力、意見交換をするコミュニケーション力も養われる。また学芸員としての身につける知識や技術だけでなく、礼儀作法や交渉力なども身につけることを伝えている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

後期に開講される「外国史(西洋)」の授業評価で見ていく。2017年度では、多くの項目で平均値を下回った。自由記述には、板書が多いと言う意見が寄せられており、また初回アンケートで高校において世界史を履修していない、あるいはほとんど知識がないと答えた学生が多かったため、次年度からテキストを指定して行うことにした。2018年度後期の評価では全体的に平均値になり、満足度は平均値を上回っていたが、もう少しゆっくり進めて欲しい、テキストをもう少し使用して欲しいと言う自由記述が見られた。2019年は学生の状況を観察しながら進め、テキストも使用頻度を上げた。結果、全体の回答値が前年を下回ったものの、自由記述では聞き取りやすかった、わかりやすかったと言う回答が増加した。2020年度の評価では、回答値が平均値を全て上回り、自由記述においてわかりやすいとの回答が増えるとともに、生徒のことを考えてくれていると言う記述も見られた。またコメントペーパーを書く時間をもう少しとって欲しいと言う記述もあり、授業を早め

に終わりコメントペーパーの記述時間を増やすことを伝え、また板書を移すのではなく、自分でまとめながらノートを記入したり、テキストに書き込んだりして自分の受講スタイルを作ることを薦めた。

2018年度後期における「博物館情報論」や「博物館教育論」（ともに2年生対象）の学芸員課程の授業評価では、すべての項目において平均を上回る回答値であった。自由記述に「レポートや発表が多い授業でしたが、とても自分のためになりました」や「とても身になる授業でした」との回答があり、改善点は挙げられていなかった。パワーポイントを使用してプレゼンをする機会を設け、ディスカッションする機会を得たことが満足度の高さにあらわれていると考え、これら学生が2019年度前期で履修する「博物館資料保存論」も引き続きプレゼンの機会を作った。さらに実習に行くため、学芸員になるために学芸員課程でどのようなことを身につけるべきか、礼儀作法も含め事あるごとに伝えた。2019年度前期の「博物館資料保存論」の授業評価では、全体的な回答値が2年次で受講した授業を上回っており、特に活用度や関心の広がり、満足度が揃って5になっていることから、自身の成長や視野の広がりを確信できた様子が窺える。やることが多くとも自分の成長を実感できたため、積極的に取り組む様子が見てとれた。

5、今後の教育目標

授業評価において、講義形式では時間外の学習努力の回答値が他の項目よりも低く、予習・復習を促す教育方法の改善が必要である。テキストを用いた授業であれば、事前にテキストを読んで質問事項を前日までに提出させ、それを反映させた授業を展開する、あるいはテキストを読んだことを前提とした簡単な確認を授業冒頭で行うなど、試行したい。また、関連書籍の紹介においてリストの提示だけでなく、実際の書籍を授業に持参し、手にとって中身を確認させるなど、より自主的に学ぶ意欲を高められるよう工夫したい。

学芸員課程においては、学芸員に必要な技術の向上を図りたい。授業では学芸員としての基礎的な知識や技術を身につけられるようになっているが、実戦の機会をより増やしていくことで、より積極的に学ぶ意欲が高まっているように感じられる。これまで仏教文化研究所の展示補助を博物館実習Ⅰの授業の一環として行なってきたが、2019年度はこの展示補助に加えて実習生による小企画展を実施した。企画から資料の貸借の交渉、資料調査、展示活動などを行うことで、自ら考案したものを実現していく過程を実践的に学んだ。さらに2020年度より仏教文化研究所の協力を得て学芸員志望者を対象として古文書の勉強会を行っている。これらを今後も継続し、さらに資料調査への参加を促して実践経験を積み、学芸員に必要な技術を向上させていきたい。

1、教育の理念

「同朋和敬」の精神を建学の理念としており、「共に学ぶ」「共に育つ」教育を実践していく。園田の担当する授業は、国語学関連の科目である。国語学の授業を通して、文化への貢献、広く豊かな教養の獲得、真理の探究を目指している。さらに、母語としての日本語・第二言語（外国語）としての日本語、自文化としての日本文化・異文化としての日本文化に気づけるように配慮している。

2、担当授業の概要

国語学概論Ⅰ	59名
国語学概論Ⅱ	64名
国語法	37名
国語史	39名
日本語文法	34名
人文学講読演習Ⅰ 4－1	8名
人文学講読演習Ⅱ 4－1	11名
基礎演習Ⅲ A	27名
基礎演習Ⅳ B	6名
人文学演習Ⅰ D	8名
人文学演習Ⅱ D	8名
人文学演習Ⅱ Z	3名
人文学演習Ⅲ D	5名
人文学演習Ⅳ D	5名
現代教養概論Ⅱ	85名（オムニバス3回）

情報社会 B 7名 (オムニバス 1回)

訓点語研究 (院) 0名

国語学研究 I (院) 0名

国語学研究 II (院) 0名

卒業論文 2名

卒業課題 3名

論文指導 5名

3、教育の方法

基礎演習Ⅳおよび人文学演習Ⅰ～Ⅳは、所謂ゼミである。1コマ90分の授業で2～3名の学生が発表し、発表に当たっていない学生は、質問や意見、感想を述べ、全員でディスカッションを行う。ゼミでは主体的な学びを重視しているため、発表する内容は、基本的に学生が自分で決める。決める際には適宜助言を行っている。ゼミで何回か発表し、教員や他の学生の意見も参考にしながら、論文指導を受け、卒業論文、卒業課題を仕上げていく。基礎演習Ⅲは、さらにその前の段階の授業である。

人文学講読演習Ⅰ・Ⅱでは、明治期の小説や室町時代のキリシタン資料を全員で読み進め、国語学的な課題を見つける。発表担当の学生が自ら気づいたテーマについて発表した後、その他の学生を含め活発なディスカッションを行う。少人数であるため、きめ細かな対応が可能である。

国語学概論Ⅰ・Ⅱ、国語法、国語史、日本語文法は、基本的には講義形式の授業である。履修学生は、34名～64名というように割合多くなっている。人数は多いのであるが、なるべく双方向の授業になるよう心がけている。64名いても1回の授業で全員に別々の練習問題を与え、口頭で解答するような取り組みも行っている。授業終了後には、リアクションペーパーを配布し、授業での気づきについて記入してもらっている。これにより、大人数の授業で、一人一人の考えが分からないところを補強できる。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2020 年度後期の授業評価アンケートを実施し、その結果を見て、よい点はさらによくし、改善すべき点は改善する方向で授業に反映させた。これについては、教員からのフィードバックとして報告をまとめ、事務にも提出した。「4. (コミュニケーション) 教員は学生が質問や発言をしやすいよう配慮しています」について、人文学講読演習で 4.4 の評価になっている所等は、割合高い評価であった。引き続き質問や発言をしやすいように心がけたいと思い、授業にも反映させている。

5、今後の教育目標

修士論文・卒業論文の指導、および、その他の講義・演習の指導に分けて述べる。

まず、修士論文・卒業論文の指導について、2021 年度は、大学院生 1 名の修士論文、学部生 8 名の卒業論文について指導を行う。2020 年度に『日清戦争以前の日本語・中国語会話集』『台湾の日本語教科書と中国語会話書の研究—昭和 20 年まで—』という 2 冊の単著を出版した経験を活かした指導を行う予定である。まとまった分量の著書や論文を仕上げるには、しっかりとした構成が必要である。2021 年 4 月に修士論文と卒業論文の構成をしっかりと出せるように指導する。研究の背景、目的、方法、結論、意義についても 4 月の時点から意識できるようにする。2020 年の卒業論文を見ると、先行研究で誰かが行った調査の引用が多かった。是非、小規模でもいいので、自分で調査した結果をもとに考察し結論を導き出せるように指導したい。

次に、その他の講義・演習の指導については、学生の主体性を重視しつつ、双方向の授業となるように心がけたい。学生が質問や発言をしやすい環境を作り、ディスカッションを行う。授業終了後にはリアクションペーパーで学生の気づきを確認し、次回の授業にフィードバックさせていく。

一方的に講義し、知識を授けるというような教育ではなく、「共に学ぶ」「共に育つ」という教育理念を重視した双方向性の高い教育にする。

1、教育の理念

私の教育理念は、学びを通して社会や人々のありようをより深く想像的に捉え、自らの主体的な態度を創造的に決定していく力を養うことにある。そのために以下のような点に留意しつつ、教育に携わっている。

①テキストの丁寧な読解

私の専門は、広くは仏教学、中でも浄土真宗の宗祖親鸞の思想に関する真宗学であり、仏教文献を対象とする。そのため仏教の概念・用語、また漢文・古文に習熟することが必要である。テキストに慣れる基礎的な学びを重視しつつ、仏教の概念・用語を適切に理解し、用いることができるようになることが、テキスト読解にまず必要である。この点を重視し、真宗学の基礎を学ぶ講義・演習を大切にしている。

②真宗を学として学ぶ

まなぶ（学・習）はまねぶ（真似）と同根の言葉であるとされるが、学としての真宗学は、親鸞の学び方に学ぶことであると先学（金子大榮『真宗学序説』、文栄堂、1966年）は指摘している。そこで真宗学とは、親鸞が仏教（経典・論疏）に学んだ学び方を明らかにし、仏の教えを歩む道を自ら選び取っていく主体的な学問であると理解している。

私は、大谷大学文学研究科真宗学専攻博士後期課程を満期退学後、真宗大谷派（東本願寺）教学研究所に勤め、主として親鸞教学の研究および真宗大谷派の教学・教化施策、僧侶養成に従事してきた。同朋大学文学部仏教学科専任教員となって以後は、それらの経験を踏まえ、これから仏教学・真宗学を学ぶ学生に対して、テキスト（聖典）を読解し、歴史を学ぶことが、仏教・真宗の人間観・社会観を学ぶことであるとともに、それは現在の人と社会のありようを考える視点であることを伝えている。

そこで特に重視しているのは、人権・差別の問題である。仏教思想、親鸞思想において平等は重要な教えであるが、この平等の教えを確かめ、人びとと共に平等を志向する主体を獲得するためには、我々自身に潜む差別性、現代社会における人権の問題への気づきが不可欠である。学生がそれぞれの経験を通して、また自らの経験を超えて社会や人々のありように目を向けることができるよう、講義・演習共にテキスト読解とともに実践的な学びも重視している

2、担当授業の概要

2020年度担当科目

教行信証講読演習Ⅰ	11名
教行信証講読演習Ⅱ	12名

真宗学概論Ⅰ	23名
真宗学概論Ⅱ	23名
教化学演習B(別科)	9名
真宗学講読Ⅲ(別科)	19名
基礎演習Ⅲ	16名
基礎演習Ⅳ	17名
宗教と人間(親鸞と現代)C	45名
宗教と人間(親鸞と現代)D	96名

3、教育の方法

現在は学部生対象の仏教テキストに関する講読演習科目(「教行信証講読演習」、「真宗学講読」、「基礎演習」)、および真宗学及び親鸞思想の概論科目(「真宗学概論」、「教化学演習」、「宗教と人間〈親鸞と現代〉」)を担当している。講読演習では、親鸞思想を学ぶ必須テキストである『教行信証』(「教行信証講読演習」)および『正信偈』(「基礎演習」)の読解を演習形式で行い、仏教概念・用語および漢文・古文に対する習熟、親鸞思想の基礎的な理解を目指している。概論では、真宗学概論は、真宗学を構成する主要なテキスト、歴史を概観し、真宗学を専攻するにあたって入門となる授業となることを目指している。1年で真宗大谷派教師資格取得を目指す別科対象の「真宗学講読」は『教行信証』を概括的に学ぶ講義形式の授業であり、「教化学演習」は伝記『宗祖親鸞聖人』(東本願寺)をテキストに、親鸞の生涯および親鸞が大切にされた法語(仏典の言葉)を通して、親鸞思想を伝える教化を視野に演習形式の授業を行い、資格取得後、僧侶として従事することを意識した授業を目指している。社会福祉学部の学生対象の「宗教と人間(親鸞と現代)」は、宗教と接点の薄い現代の若者が、真宗に少しでも触れ、自らや社会のありようを振り返る視点となるよう、親鸞の生涯と思想を視聴覚教材も用いつつ、授業を行っている。

講義形式の授業では、主に資料及び板書を用いつつ、パワーポイントやDVDを用いた視聴覚教材(写真資料、漫画・アニメ)を用いている。親鸞が生きたのは平安末から鎌倉時代であり、親鸞思想の背景となる歴史、社会状況共に現代人には容易に把握しがたい側面がある。ここに古典を理解する一つの障害があり、時代と社会を異とする歴史資料としての側面に注意を向けつつ、現代から過去、過去から現代を思考する往還的な視点の中で、テキスト及び思想を捉えるよう、工夫している。

たとえば文献研究は、活字資料を主なテキストとなるが、親鸞には多くの自筆著作が遺されており、こうした原本(複製・写真)に触れることも親鸞思想を考えるに際して重要なことである。『教行信証』及び『正信偈』を用いた文献研究科目も含め、親鸞という人に触れることができる資料を用いる他、歴史背景や社会状況を視覚的に捉えることができるよう、漫画・アニメを用いる。

また、教育は、教員の意見・考えを押しつけるものであってはならず、学生自身が学び、

新たな発見をしていくことが重要である。学生の意見・考えは、学生自身が新たな知見にいたるための重要な手掛かりであると考え、学生の意見・考えを尊重し、対話的に授業ができるよう努めている。そのため授業時、あるいは授業以外でも質問・相談ができるよう、少人数教育である点を活かして関係を構築するよう努めている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートが行われた科目は以下の科目である。

教行信証講読演習

テキストに関する学生の演習発表と講義が主な内容であるが、学生の発表により議論や内容の確かめが深まるとの評価がある一方で、学生間の議論からは学年が異なる学生の興味・関心、習熟度に違いがあり、複数学年の学生に応じた配慮が必要であると考えている。また授業評価アンケートでは、全体結果と比較して概ね平均値を上回る回答値であったが、音響・資格機器に関しては評価が下回っていた。文献資料のみではなく、視覚的に学ぶ工夫も必要かと考えている。この点を意識し、発表・議論・講義に際して、今後工夫していきたいと考えている。

真宗学概論

授業評価アンケートでは、わかりやすい、あるいは、初めて聞くことが多く学ぶことが楽しいとの評価もあるが、興味・関心が持てる工夫や質問・発言のしやすさ、音響・視覚危機が低くなっていること、また小レポート・期末テストからも学生の理解度にばらつきがあることがわかる。概論は専攻科目の学びを進めるに際して基礎となる科目であるので、学生の理解度を確認しつつ、授業を進めていく必要があると考えている。

真宗学講読

興味・関心が持てる工夫や授業の満足度が低くなっていること、また授業内容について難しいという評価もあった。初めて学ぶ事柄、言葉であることに留意しつつ、言葉の用い方や説明に注意していきたいと思うが、学生の興味・関心に応じた授業にしていくためにも質疑などコミュニケーションに工夫をしていきたい。

宗教と人間（親鸞と現代）

授業評価アンケートでは多くの項目で平均を下回っており、課題が多くある授業である。社会福祉学部の学生対象で、はじめて宗教概念に接する学生がほとんどである。必要上専門用語を用いことがあるが、理解できなければ興味・関心を持ちようがないのも当然であり、授業の狙いを明確にし、興味・関心を持てるよう、視聴覚教材も積極的に活用しつつ、改善をしていきたい。

5 今後の教育目標

前記教育理念に基づきつつ、同朋大学が重視する少人数教育を活かして、全人的な教育を心がけ、学生の生きる力を養う教育を目標としている。

文学部仏教学科は、真宗大谷派僧侶となるべく、真宗大谷派教師資格取得を目指す学生の他、仏教に興味を持って入学する学生、あるいはまったく仏教に縁のないところから入学してくる学生もいる。関心も目標も異なる学生が共に仏教を学び合う環境作りが課題である。昨年コロナ禍の中で、Microsoft teams を用いた遠隔授業を行ったが、その中でチャット機能を用いた対話形式の授業を行う機会を得た。その際の学生の発言や対話の様子からは、授業時に人前で話をするのを敬遠する学生は多いが、決して意見や考えを持っていない訳でなく、声を出すことができる環境が重要であると改めて認識した。対面授業では様々な工夫があると思うが、学生が考えを言葉にし、対話しながら学ぶ環境を目標として取り組んでいきたいと考えている。

1、教育の理念

現代教養専攻では、その目的を「多様な価値観が共存するグローバルな現代社会をよりよく理解して生きていく教養力を身につける」としている。深町の担当授業では学生たちが異文化を理解できるようになる（あるいは、そのような努力をするようになる）ということ意識して教育を行っている。自国の言語や文化を誇る態度は素晴らしいものだが、それによって単一言語・文化的な精神を培われてしまうと、国際化していく日常のなかでも頻りに訪れる差異との出会いに対応しづらくなってしまふからである。文学、特に外国語文学を学ぶことは、異文化理解にとっても有用である。他社の目線に立ち、作品世界を疑似体験することで、その言語が話されている環境だけでなく、登場人物に心の中に入り込み、異言語による精神的な異文化体験をすることができる。文学においても多文化主義といわれる昨今である。現代文学においては、もはや「・・・国文学」という区分けも通用しなくなってきた。その一方では、台頭しているアフリカやアジアの作品を読むときに、先進国の読者はその作品が見せる異文化の世界や登場人物に対して、文化の差異を乗り越え理解しようとはせず、また、同じ人間として共感するのではなく、どこか離れた態度の読書になりやすい、という読み手の二重基準があるということが知られている。国際化していく社会で積極的な知的共生ができる人物が求められるようになることは必定といえるが、グローバル社会を生き抜くには、単一言語（文化）的精神を取り除き、どのような異文化でも尊重する態度を養うことが最低条件だと考えている。また、教養英語教育においては、異文化を認める態度を身につけることで、英語をありのままに理解することに繋げることを念頭においている。そのような態度の形成により、日本語との違いを肯定的に捉え、両者の差を理解し、持続可能な英語学習が続けられるように導くことを目指している。多文化主義の波を受け止め、異文化を尊重することができる有能な人間を育てるため、文学と言語の両面から指導することを理念としている。

2、担当授業の概要

英語 1A 22名
英語 1L 19名
英語 2A 19名
英語 2L 21名
英語 3G 27名
英語 3H 29名
英語 4G 26名

英語 4H 31 名
人文学購読演習 I 5-4 16 名
人文学購読演習 II 5-4 13 名
英米文学 16 名
現代教養概論 I 78 名
現代教養概論 II 85 名
基礎演習 III E 26 名
基礎演習 IV C 5 名
人文学演習 IE 5 名
人文学演習 II E 5 名
人文学演習 III E 2 名
人文学演習 IV E 2 名
海外語学研修 0 名 (20 年度は新型コロナ流行のため閉講)

3、教育の方法

様々な科目を教えているが、ここでは科目を語学とそれ以外に分けて説明する。語学教育については、学生の性格や傾向を学び、どれくらい受動的・能動的にするかといった割合を調整している。また、20 年度は特に Microsoft の Forms を使った小テストを行い、単語力の強化と授業理解の助けとした。その小テストの結果は授業中に確認できるため、学生が苦手な箇所を入念に教えることができている。他の科目においては、多様な価値観を理解するためにジャンル批評やジェンダー批評、文化批評や新歴史主義などの立場から短編小説を中心に講義している。短編小説を扱うのは英米文学に馴染みのない学生に必要な知識をできるだけ与えたいとの意図からである。また、その理解を深めるために、レポートの作成や発表を義務にしている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

19 年度と 20 年度の授業のうち、授業アンケートを実施したものについて、学生評価と改善点について述べる。

英語 1、2 については質問を聞く姿勢が高く評価されている。また、学生の授業態度もとてもよく、教えたことへの吸収も良い。教養英語のクラスを修了した後も各自英語を学んでいってくれるように、英語を学ぶことへのモチベーションを高める試みをしている。アンケートの数値は全体的に高いが、期末試験の結果からも学生の語彙力の不足を感じているため、今後の授業ではその点をより強めていきたい。

英語 3、4 についてはコメント欄から日常語を多く学べることや、学生の質問を多く受け付ける姿勢が好意的に受け取られていることがわかる。また、特に悪いコメントもなく総体的に授業の進め方は間違っていないと考える。全体的にポイントも高く、特に教員の

熱意や授業の進め方などが高く評価されている。しかし、面白い授業をすることに傾いたという反省がある。会話の定型文を覚えさせるなどの地道であるが、汎用性のある英会話力を身に着けることに今後はより重点を置きたい。

英米文化についても平均的には高い数値が出ている。しかし、声の明瞭さが平均よりわずかに下回っているなど改善すべき点もある。最近ではコロナ対策で窓を大きくあけて授業をしていたが、アンケートの結果から、それを意識した話し方をすべきだとわかった。画像を多く取り入れたスライドによる講義は概ね高い評価を得ているようなので今後も継続していきたい。真剣な学生が特に多い授業でもあるため、彼らの向学心にしっかり応える授業づくりをしていきたい。

人文学講読演習については学生の成長を特に感じる事ができるクラスである。第2週や3週辺りの理解度と学期の中頃の授業では彼らの読解力はまるで違ったものになっている。ほとんどの学生は予習をしっかりとし、教科書やノートに訳文や調べたことがびっしりと書いてある。このような学生の態度から、彼らへのモチベーションの高め方や授業の運びについては問題なく、受け持っているクラスでも1番か2番目に良い授業ができていると考えている。しかし、全くレベルの合わない学生がわずかにいるのも事実で、そのような学生への対応は考えていかなければならないと感じている。

5、今後の教育目標

現代社会で必要な人材を育成するのに、めまぐるしく変化し続ける現代を理解し育てることが肝要だと考える。また、異文化への知識と柔軟な態度を持つことは学生が社会で活躍する機会を多く持つことができるはずである。しかし、そのような目的に対して、自分がどれほど忠実であるかという点については自己反省をする必要がある。というのは、知識は測定しやすく、また、教えるのに比較的容易であることから知識を教授することへの偏りがあるのではないだろうか。例えば、語学を教えながら痛切に感じるのだが、学生たちが単一言語的思考が強すぎるあまり、日本語にはない異国の言語の考え方に心を閉じるケースを多くみる。英語ではこのような考え方を、ということを受け入れず、日本語に対応していないため理解しようとしないというのは、文化背景の大きく違う他者を受け入れないということにも通じる。国際人を育てるということは、寛容な考え方を育てるということでもある。そのような態度を育てずに、外国語、あるいは外国語文学を教えている深町の教授方法ではあまりに表層的になってしまうだろう。それゆえ、今後の教育目標は異なる考え方に対する寛容な態度を養うということをより重視し、自身の教育理念の実現をはかりたい。

1 教育の理念

建学の精神を抛りどころとし、共に問う姿勢を基本におきつつ、大学という場所でこそ可能な、**人文科学の基本**を学んでもらう。具体的には語学・歴史・思想的理解のうえに成りたつ**文献学**とはどのようなものかを伝えてゆく。またアジア諸地域に伝播し、各地の伝統文化や宗教と交流し、独自の展開を遂げた**仏教文化**を学ぶことで、次世代の若者に**異文化共生**の国際感覚を身につけてもらえるよう務める。

2 担当授業の概要

2020 年度担当科目

パーリ語基礎学	28 名
仏教史 (インド)	21 名
宗教と人間 (釈尊と現代)	104 名
仏教学概論 I	18 名
仏教学概論 II	25 名
基礎演習 II	16 名
映像文化概論 I	7 名
映像文化概論 II	5 名
仏教学講義 (別科)	19 名
仏教人間学研究 I (大学院)	9 名
仏教人間学研究 II (大学院)	2 名
仏教文化文献研究 (大学院)	5 名
教化学実習 I (大谷派教師課程)	7 名
教化学実習 II (大谷派教師課程)	7 名
教化学実習 (別科)	19 名

3 教育の方法

経験的に、講義においても講読・演習においても適切なテキストを定めることが重要と考えている。学生はテキストの目次によって授業の全体像を把握できる。(本来ならばシラバスによっ

て授業の全体像を把握してほしいところだが、実際問題としてシラバスにしっかり目を通す学生は少ない。テキストを持参させ、繰り返しその目次の中で毎回の授業がどこに位置するかを伝えるよう心がけている。) また予習・復習・課題提出に際しても有効である。現在、自作テキスト形式の授業(全文を自分で執筆しコピー・簡易製本して学生に無料配布し、これに基づいて授業を進める形式)は本年度については三科目に留まる(「宗教と人間」「パーリ語文法」「仏教史」)。本来は「仏教学概論」についても自作テキストを用意したいのだが、いまは時間的余裕がないため、やむなく既成の仏教入門書を代用している。大谷派教師資格科目については東本願寺出版部の指定テキストを使用している。基礎演習は学生が各自に課題図書を選び、読書レポートを提出し、それを個別に添削・指導して、将来的に卒業論文を書くための最初の準備としている。

4 学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートは例年と較べて大きな変動はない。改善の努力が足りないとも言えるが、自由記述欄に書かれた感想はこれまでより否定的な意見が少なくなり、代わりに好意的な感想が増えていたので気をよくしている。昨年来、各授業に Microsoft Teams を併用できるようになったため、インターネット上の関連記事・画像・動画のリンクを紹介して、学生が気軽に予習・復習できるよう配慮している。大学での研究はあまり安易なものであってはならないが、学問への入口としてネットは今後さらに活用していきたい。インド仏教およびアジアの仏教文化を紹介するにあたっては視覚資料も重要である。プロジェクタ常設の教室において映像・画像を見せる割合も少しずつ増やしている。

一方で年々、学生とのコミュニケーションに難を感じているのも事実である。特に昨年はメールを通じてのやり取りで指示を与えたものの十分な意志疎通がはかれず、授業評価について学生から相談票が出た案件も発生した。学生との直接面談を通して一定の理解は得たが、近年はレポート等の訂正を命じたら再提出すること、指定した教科書は購入して持参すること、そもそも講義には筆記用具やノートを持ってくること、といった常識的に理解できる(と我々が思っている)ことに関しても、事前に十分な説明がなかったという批判が寄せられる場合もある。常識を捨てて改善を考えなければならないところまで来たとも思う。

5 今後の教育目標

学ぶことの楽しさと、大学の学問とは本来、資格を取るためや就職のための努力ではなく、真理を探究したいという衝動を解放する喜びであることを、若い世代に少しでも理解してもらえるよう今後も務めてゆきたい。

1、教育の理念

本学文学部人文学科では、人間そのものの在り方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、現代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことを、学科全体の教育目標として掲げている。私は人文学科の中でも、日本文学専攻の教員として、主に近現代文学に関する授業を担当しており、文学をとおしてさまざまな時代や社会の中での人間そのものを見つめるとともに、テキストの読解に必要な知識や思考力、また、テキストを時代や社会といった文化的背景と関連づけて考えることのできる広い視野を養うことを目指している。文学は虚構ではあるが、そこに描き出されているのは、まさに人間の真理である。文学を探究することによって、現代を生きる力を育んでいきたいと考えている。

2、担当授業の概要（科目名および受講者数）

- ・日本文学概論Ⅱ 54名
- ・日本文学史（近現代）2 47名
- ・日本文学（近現代）2 18名
- ・人文学講読演習Ⅰ2-2 14名
- ・人文学講読演習Ⅱ2-2 16名
- ・人文学講読演習Ⅰ7-1 19名
- ・基礎演習ⅠA 26名
- ・基礎演習ⅣM 9名
- ・人文学演習ⅠB 9名
- ・人文学演習ⅡB 9名
- ・人文学演習ⅢB 7名
- ・人文学演習ⅣB 7名
- ・現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式、2回分を担当） 78名
- ・論文指導 7名
- ・卒業論文 6名
- ・卒業課題 1名
- ・国語科教育法Ⅰ（教職科目） 5名
- ・国語科教育法Ⅱ（教職科目） 5名
- ・国語科教育法Ⅲ（教職科目） 7名
- ・国語科教育法Ⅳ（教職科目） 7名

3、教育の方法

まず、「基礎演習」「人文学演習」「人文学講読演習」といった演習形式の授業においては、原則として、授業ごとに設定されたテーマについて、学生自身が分担して事前に調査や研究を行い、その発表をもとにしたディスカッション形式で授業を進めている。学生が主体的に課題に取り組むことで、文学テキストそのものを理解する力を養うとともに、情報収集や分析の方法を実践的に身につけることができると考えるからである。また、学生同士のディスカッションをとおして、各自が、自分の意見を言葉としての確に表現すること、あるいは逆に、他者の意見をしっかりと理解することの重要性に気づき、互いの視野を広げ、テーマに対する考えを深めていくことが可能となる。最終的には、そのテーマに対する自らの考えをレポートとしてまとめることで、卒業論文に向けた論文作成の方法も徐々に身につけていく。

次に、「日本文学概論」「日本文学史」「日本文学」「現代教養概論」といった講義形式の授業においては、第一に、わかりやすい授業を心がけている。その工夫の一つとして、授業では毎回、自作の資料プリントを配付し、それを用いながら授業を進めている。また、授業ごとに学生の理解度は異なるため、授業の最後には毎回、配付したコメント用紙に、学生自身が授業の中で感じた疑問点や興味を持った点などを記入してもらい、次の授業の具体的な展開に役立てている。そして、二つ目に心がけているのは、学生自身に考えさせる授業である。講義形式の授業では、どうしても学生が受け身になってしまうことが多いが、授業の中でこちらから学生に問いかけたり、逆に、学生から意見を言ってもらったりすることで、学生自身が考える時間を作り、できるだけ双方向的な授業展開になるよう配慮している。また、先ほどのコメント用紙に記入された学生からの疑問や意見の中で、ほかの学生の考えを深めるために役立つと思われるものについては、必ず次の授業の冒頭で紹介するようにしている。

最後に、「国語科教育法」であるが、この授業は人文学科の科目ではなく、中学校・高等学校の国語の教員免許取得を目指す学生が、3～4年次に履修する教職課程科目である。3年次には、学習指導要領の理解や学習指導案の作成など、国語科教育の基礎的な学習や実践を行い、4年次には、模擬授業を重ねることによって、授業や学習指導の上達を図っている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2020年度の「学生による授業評価アンケート」では、「日本文学概論Ⅱ」「日本文学（近現代）2」「人文学講読演習Ⅱ 2-2」の3つの授業について、学生からの評価が行われた。

その結果は、まず「日本文学概論Ⅱ」は、全項目において、5段階評価が「全体結果」の平均値を上まわることができた。学生からの具体的な意見も、「聞く側に興味関心を持たせるような授業なので聞いていてわかりやすいと思った」「とても分かりやすく楽しく受け取ることが出来ておりとても満足している」「分かりやすく文学について面白く学べるいい講

義」「文学という分野での、新しい発見があったので、満足している」「授業自体がとても面白く近代文学に関する自分の視野が広がられているような感じがします」「授業のコメントに対してレスポンスがあって、それによって資料が追加されたりして生徒側の興味に合わせてくれる部分がいいなと思います」「講義形式の授業だが、所々で意見を求めたり挙手をするような状況がありよかった」というように、いずれも肯定的な評価であった。ただ、「教員は学生が質問や発言をしやすいように配慮しています」の評価が、中ではやや低かったため、今後の授業では、学生の発言を求める機会をもっと増やしていきたい。

次に、「日本文学（近現代）2」は、「教員の指定した教科書や参考書は、授業の中で十分に活用されています」の評価が、「全体結果」の平均値よりも低かったが、ほかの項目については、おおむね高い評価を得ることができた。学生からの具体的な意見も、「前期受講した日本文学史で日本近代文学の魅力に引き込まれました。この授業も毎回初めて教えて頂く事ばかりで、いつも新鮮な気持ちで授業に臨んでいます」「わかりやすくとても良いものだと思う」「わかりやすく、前回の復習もあるので良い授業かと思います」「近現代の文学が、政治・社会に深く関わっていたことがわかった」といった、いずれも肯定的な評価であった。毎回授業資料を準備し、それを中心に授業を行っているため、教科書はどうしても傍用になってしまっていたが、今後の授業では、教科書を意識的に用いるとともに、予習あるいは復習の際に役立てるように学生にアドバイスを行いたい。

最後に、「人文学講読演習Ⅱ 2-2」は、全項目において、5段階評価が「全体結果」の平均値を上まわるだけでなく、4つの項目で5点満点という高評価であった。学生からの具体的な意見も、「小説の細かいところまで深く知ることが出来るので良いと思う」「とても楽しく、また新しい知識を多く得ることができる良い授業だと思います」「発表のサポートも先生がしてくれて発表しやすくてよかった。発表以外にも講義もあって背景などを知れた」「先生が時代背景など補足説明を行って頂けるので、理解が深まります」といった、いずれも肯定的な評価であった。

「学生による授業評価アンケート」の対象となった授業以外についても、常に授業内容を振り返りながら、より満足度の高い授業を実現できるよう、改善を行っていくつもりである。

5、今後の教育目標

最終的には、文学をとおして人間や社会の真理を探究するとともに、その探究をとおして、現代を生きる力を学生たちに育んでいくことが教育目標である。その目標をできるだけ実現するためにも、まずは、学生が興味・関心を持つことのできる授業、そして、その興味・関心をもとに、学生自身が課題を見つけ、解決していく力を養えるような授業を心がけるつもりである。

1、教育の理念

同朋大学の建学の精神「同朋和敬」に基づく「共に学ぶ」「共にいきる」教育の実践を目指している。私は、主に日本文学（古典）の教育を担当しており、昨今、「なぜ古典を学ぶのか」という問いが多く出されるようになってきたと感じているが、このような問いを含めて疑問に真摯に向き合って思考することこそが、人文学において必要なことと考えている。学科のポリシーに掲げられているように、人文学は、「混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育む」ものと言えるが、幅広い学びとともに、学生達が何かを探究する喜びを実感できるような教育を行いたい。

2、担当授業の概要

主に日本文学（古典）の教育を担当している。2020年度の担当授業科目の概要を示す。

日本文学概論Ⅰ, 前期, 日本文学専攻必修, 古典文学概論

日本文学史（中世）, 前期, 鎌倉時代・室町時代の日本文学史

日本文学（中世）Ⅱ, 後期, お伽草子とその周辺

日本文化史（古代・中世）, 後期, 夢をめぐる日本文化史

人文情報学, 後期, 人文情報学入門

情報社会, 後期, 教養共通科目, 2回分担当「文系にとってのデータ 文章や画像の利用と著作権」

現代教養概論Ⅱ, 後期, 必修, 2回分担当「日本古典文学を考えるⅠ 現代社会において古典を学ぶことの意味」「日本古典文学を考えるⅡ 物語の伝承に時代の関心を読む」

基礎演習Ⅰ, 前期, 1年次必修, 人文学のための基礎力の養成

基礎演習Ⅱ, 後期, 1年次必修, 人文学の研究方法

人文学講読演習Ⅰ 1 2 - 1, 前期, 『宇治拾遺物語』を読む

人文学講読演習Ⅰ 1 3 - 4, 前期, 『伊勢物語』を読む

人文学講読演習Ⅱ 1 2 - 1, 後期, 『宇治拾遺物語』を考える

基礎演習Ⅳ, 後期, 2年次必修, 古代中世文学研究（ゼミ）

人文学演習Ⅰ, 前期, 3年次必修, 古代中世文学研究（ゼミ）

人文学演習Ⅱ, 後期, 3年次必修, 古代中世文学研究（ゼミ）

人文学演習Ⅲ, 前期, 4年次必修, 古代中世文学研究（ゼミ）

人文学演習Ⅳ, 後期, 4年次必修, 古代中世文学研究（ゼミ）

論文指導, 4年次必修, ゼミ生に対する卒業論文の指導

3、教育の方法

上述の教育理念の達成のため、初年次教育、あるいは、授業の1回目において、「大学での学びとは何か」「古典にはどのような意味があるか」など、学ぶことの意義を問うようにしている。

古典文学への関心を高めてもらうため、さまざまな資料の画像をプロジェクターで投影して示している。

講義科目における成績評価の方法としては、毎回のコメントカード（考察・発見の記録）を試験と同程度に重視している。コメントカードの目的は、主に、内容理解の確認と思考力や表現力の向上であるが、学生を個別に理解して適切な助言をするためでもある。アドバイザーとしてかかわる基礎演習や人文学演習の学生だけでなく、できるだけ多くの学生を知ってそれぞれに合った対応ができるように努めている。必要な情報は教員間で共有するように心がけている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2020年度は新型コロナウイルス対策により、前期の授業評価アンケートは実施されず、後期は11月に中間アンケートを行い、その後の授業内でフィードバックを行った。

「日本文学（中世）」では、「御伽草子のことを深く学ぶことが出来るので面白く、実際の史料を用いて説明しているので分かりやすく印象に残りやすい」「配布資料も適切で、プロジェクターを利用した非常に分かり易い授業になっている」などの感想を得た。この科目では、自分の専門分野をテーマとして専門性の高い授業を行い、多くの受講者がそれに応えてくれたと考える。一方で、「先生の説明したい事柄が多すぎて、資料紹介のテンポが速くなりがち」「一部騒がしい生徒が居て気が散るので、厳格な対応をして欲しい」との指摘・要望があったのは、受講者への配慮が不十分だったためであり、アンケート以降は意識して授業を行うようにしている。

「日本文化史（古代・中世）」では、「歴史的な和歌や作品などについて深く知ることができて面白い」「資料が豊富で良い」という感想の一方、「内容が難しい」「聞く側の興味をそそられるような授業をして欲しい」という意見もあった。「日本文学（中世）」と同じく学科専門科目であるが、この科目の方が受講者の関心の程度に開きがあり、「なぜその事柄を扱うのか」についての説明が足りなかったと思う。説明を行うとともに、その事柄が本当に適切であるかの検討を続け、より良い授業にしていきたい。

「人文情報学」では、「あまり知らないことを知れていい」「受講している学生は少ないがその分教員に質問がしやすい」などのコメントを得た。この授業は、2019年度からのカリキュラムで設置された科目で、授業方法についてはまだ手探りの部分があるが、少人数で個々の学生に接することで、情報処理に対する学生の知識や要望をおおよそ把握することができた。次年度以降の授業に役立てたい。

5、今後の教育目標

- ・人文学を通して人としての豊かさを育むこと
- ・古典文学に関する研究の深化と授業方法の開発
- ・人文情報学の授業方法の開発

一、教育の理念

1 同朋大学の建学理念は「同朋和敬」である。お互いに違いを認め合い、敬い、尊重しあえる人間性を育てていくことが重視されている。学友と力を発揮あって伸び伸びいと学んでいくことを目指している。

2 仏教精神を重視する。

私は、仏教の教えを大事にしている。仏教の人間観には、間をすべて蓮としてとらえている。人は皆美しい花を咲かせる本質を持っている。蓮の色はそれぞれであるが、蓮という本質は変わらない。蓮が置かれている状況はさまざまでも、縁に恵まれて、より美しく咲くことができる。

私も、学生一人一人を蓮としてみている。学生は、性格もそれぞれであるが、誰もがかけがえのない存在である。一人一人の学生が未来への希望とともに、成長していく環境を作ることが私の教学の基本精神である。

二、担当授業の概要

1 中国思想 80名

2 宗教と人間 97名

3 人文学講読演習 27名

4 中国現代事情<地誌を含む> 30名

5 基礎演習I1 8名

6 基礎演習II1 8名

7 基礎演習III1 8名

8 基礎演習IV1 8名

9 基礎演習IVG 8名

10 論文指導 6名

11 卒業論文指導 3名

12 卒業課題指導 3名

13 中国語 1 A 31名

14 中国語 1 B 27名

15 中国語 1 C 25名

三、教育の方法

1 「深入浅出（内容は深く表現は易しく）」

授業で中国の奥深い文化思想・仏教思想を学ぶとき、豊かなイメージーションと論理的な思考が要求される。簡単に検索したり、暗記したりすることになれている学生との間にあるギャップを御解決するために取り入れたのは「深入浅出（内容は深く表現は易しく）」という中国の伝統的な教育法である。DVDや地図や絵などのイメージを入りに次第に奥深いところへと導いていく方法である。

2（「因人而施に人に^よ因って教を施す」）ともいう。これも中国の伝統的な教育方法の一つである。その人に適した教育をする）

入学間もなく、スタート時点では、さまざまな知識の落差があり、それぞれ得意・不得意の面もある。それらをふまえて、一人一人の学生が自らの長所を発見し、生かし、苦手なところ、足りないところを自覚し、克服するように指導工夫してきた。特にゼミの授業でこの方法は顕著な効果をもたらしている。

3 学生の声に耳を傾ける

毎回の授業の後、学生にコメントを書いてもらう。次の授業で、①学生が指摘した問題点をみんなに知らせ訂正する。②学生の質問に答える。③授業について、アドバイスをした学生を励まし、成績評価にプラスにする。

四、学生からの評価と授業改善への努力

今まで怒ってきた「人文学講読演習」・「中国思想」・「中国現代事情」などが学生に満足してもらえる授業であったが、それに比べると、「宗教と人間」の満足度が低かった。振り返ってみれば、そこに、一つの矛盾がある。それは学生の願いと森村が目指す学習の目標とのずれというところにある。学生たちが求めるのは、わかりやすく、ノートを取りやすく、合格しやすいという授業であるが、森村が目指すのは、仏教の教えを若い世代に伝え、仏教が伝えようとする人間存在の真実を深く受け止めてそれを現代に生かすこと、人生の糧にすること、さらに仏教の視座から現代と歴史問題について考えることである。今後こ

の矛盾を解決してどのように学生の心に届けるか模索している。

五、今後の教育目標

- 1 最新の情報を授業にもたらし、内容をより豊かにする。
- 2 言葉使いを工夫し、よりわかりやすい授業をする。
- 3 今までの長所を生かし、不足を克服し、より学生に満足してもらえる授業を工夫する。

1、教育の理念

本学文学部人文学科のアドミッションポリシーに、「文学・歴史・思想・文化の各分野におけるアカデミックな教育を基盤に、人間そのもののあり方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むこと」を教育目的とするとあるが、私はその方針に基づいて、中国古典文学（史伝、中国哲学を含む）をベースに、中国語、伝統文化、映像文化に至るまで、「日本文学」「歴史文化」「現代教養」の三専攻にまたがって幅広く科目を担当しつつ、学生たちの基礎力や感性を磨くことを目指して教育に取り組んでいる。

2、担当授業の概要（受講人数）

2020 年度は以下の科目を担当した。

① 全学向け（基礎力養成に関わる）科目としては、

漢文基礎学Ⅰ（前期）	51名	漢文基礎学Ⅱ（後期）	48名
中国語ⅠD（前期）	27名	中国語ⅡD（後期）	29名

② 文学部向け教養科目としては

現代教養概論Ⅰ（前期）	78名（3コマ分担当）
中国芸能（後期）	35名 + 表象文化論（後期）26名（同時開講）
アジア現代事情（後期）	14名

③ 文学部向け専門科目（及び教職科目）としては

中国文学概論Ⅰ（前期）	21名	中国文学概論Ⅱ（後期）	20名
人文学講読演習Ⅰ 8-3（前期）	8名	人文学講読演習Ⅱ 8-3（後期）	15名

④ 人文学科（ゼミ）専門科目

基礎演習ⅣN（後期）	6名（現代教養専攻）		
基礎演習ⅣF（後期）	4名（日本文学専攻）		
人文学演習ⅠH（前期）	8名	人文学演習ⅡH（後期）	8名
人文学演習ⅢH（前期）	8名	人文学演習ⅣH（後期）	8名
卒業論文・課題	8名	論文指導	8名

以上

3、教育の方法

授業の方法としては、講義系の科目と演習（講読）系の科目とで大きくやり方は異なる。

講義系の科目では、予め用意したプリント資料を学生に配付し、その資料に基づいて逐次説明を加えながら講義するスタイルを基本とするが、学生たちの理解を深めるために多くの映像資料を副次的に用いるようにしている。授業時には折に触れて学生に質問をし、定期

的にコメントペーパーを出させるなどして、学生の理解度を確認しながら進めることを心がけている。

演習系の科目のうち中国文学関係の授業においては、主として中国古典（漢文）のテキスト（白文の状態）を配布し、訓点をつけて読解することを学生たちに課している。毎回担当者を定め、工具書（辞書など）や訳本、解説書等を参考にしてまとめた自分の読み方をレジュメとして予め提出させた上で、授業時にはそのレジュメを元にその読み方の可否を受講者全員で検討していくという方法を採用している。標準的な読み方を一方的に教えるというのではなく、学生たちに自分で考えさせ、なぜそういう読み方になるのかを議論させることで、より深い読解力が養成されると考えている。今年度より現代教養専攻の演習（ゼミ）を別途持つことになったが、そこでは「表象文化」「地域文化」をテーマとしており、授業においては表演芸術（映画、演劇、古典芸能など）のビデオを実際に鑑賞した上で、その面白さ、芸術的価値などを受講者全員で討論する方法を採用している。

演習系の科目においては、文章を読むか動画を観るかの違いはあれども、学生個々が独りよがりにならず、議論を通じて自分自身を客観視できるようになることを目指すという点に違いは無い。

これらの教育方法は長年大学教育に関わる中で自然と醸成されたものだが、結果的にアクティブ・ラーニングなどの考え方にも沿うものとなっており、学生たちの自発的な学習意欲をかき立てるのにも大いに役に立っていると考えている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

私が担当する科目は十年以上継続して実施しているものが少なくないが、その間の学生の授業評価アンケートの結果を見る限り、同一授業での経年変化、年ごとのばらつきはほとんど見られない。2020年度後期は初めて学期途中にアンケートを実施したために、一つの講義科目で一名低評価の項目がでたが、それは私が授業前半で意図的に仕掛けた結果がストレートに表れただけのことであり、学期末までに私の意図が学生に理解されたことは授業後半のレポート等で確認済みである。このように、全体的な授業評価においては過去から現在に至るまで問題となるような結果が出たことはほぼないと言ってよい。

授業の質に関しては、講義系の科目においては、割り当てられた教室の設備などの二次的な要素が影響する場合がなくはないが、演習（講読）系の科目においては、その年々の受講生のレベルによってほぼ100%決まると言って差し支えない。ただ、どんな場合でも受講生が満足感を得られるような努力はし続けており、それがアンケート結果にも表れていると考えている。

人文学科の場合、1年次の基礎科目の受講状況などから、2年次以上の学生の個々の学力レベルや傾向を、われわれ教員はほぼつかんでいると言ってよい。演習（講読）系の科目は2年次以上が受講の対象となるが、私の場合、受講生の構成を見て授業の運営方針を立てるようにしている。2, 3, 4年生の人数バランスや、学力レベルの高い学生の割合等を勘案し

た上で、解説の質や量を変更し、学生の反応をよく観察しながら進めるようにしているため、年度当初はなかなかついて来られなかった学生も、半期終わる頃にはかなり変化を見せるようになるのが通例である。

気をつけないといけないのは、アンケートの存在を気にしすぎることである。学生に迎合するのではなく、学生をより高いレベルに引き上げるという信念をもって、時には厳しさを貫く意志を持ち続けることが大切である。最初の授業時に、訓点のついていない漢文の原典資料を目のあたりにして絶望的な顔を見せた学生も、継続して指導をすることで例外なく力がつくことを私は経験上知っているので、授業時の学生たちの変化に敏感になって根気よく指導すること以外にやるべきことはなく、アンケートはそれを確認する程度のものであるようにしている。

5、今後の教育目標

文科省が唱える ICT 環境整備やギガスクール構想と本学学生の現状との間には明らかに温度差がある。学生の大半にとってはスマートフォンが唯一の端末で、学年が進み、就職を考え、卒論を書かなければならない段階に至っても、パソコンを使いたがらない傾向があることがここ数年より顕著になってきたように思われる。

今年度卒論（卒業課題）指導を 8 名行ったが、その半数は、最後に卒論をプリントアウトするためにのみパソコンを利用し、それまでの全ての過程をスマートフォンのみで行うことを譲らなかつた。スマートフォンの高機能化によって、情報収集からデータ保存、レポートの作成に至るまで、パソコンよりも便利に行えるようになってきたことを考えれば、パソコンで卒論を書くようにと強制することには意味が無いと思知らされることとなった。本学学生の就職先を考えれば、「社会に出るためにパソコンが必要である」というレトリックも通用せず、教育ツールとして一人一台の「パソコン」という目標設定は検討の余地があると考えざるを得ないのである。

今年度前期にはリモートでの授業対応を余儀なくされたが、双方向のコミュニケーションツールである「Teams」を使って例年以上に学生たちに手厚く指導したような気になっていたものの、対面にもどった時点でそれ以前の 2 ヶ月のリモート指導がほとんど学生の身になっていないことを実感することとなった。対面が絶対とは言わないが、リモートで一定の効果上げるためには、ハード面等の環境整備だけでなく、教員と学生双方に周到的な事前準備と意識改革の必要がある。

とすれば、我々人文学をベースとする教員が大学教育の中で担うべき役割は、従来通り学生たちに、文献を読む能力（読解力）、資料を分析する能力（分析力）、それに基づいて議論する能力（ディベート力）、結果を発表する能力（プレゼンテーション力）を身につけさせるようトレーニングすること以外にはない。技術は時とともに移り変わるものであるので、それに乗り遅れないよう最低限努力する必要はあるが、技術に支配されない普遍的な教育目標を持ち続けることこそ大切であり、それは一年ごとには変わるようなものではない。